考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.259
2025.4.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第2回 ◆ 馬渡埴輪製作遺跡の発見と調査前夜 ◆

馬渡埴輪製作遺跡の発見は、1964（昭和39）年の春に勝田三中2年生であった、土田昭一・袖山勝雄が、通学区内である勝田市馬渡の本郷川支谷の谷頭南斜面（A地点）で埴輪片を発見する。2人は同中の社会科教諭工藤昭次に報告をする。

工藤は同僚教諭と2人の案内で、出土場所を訪れ、埴輪を学校に持ち帰り洗浄し、ほぼ完全な馬形埴輪（左写真）であることを確認した。工藤は直ちに市教育委員会に報告し、勝田警察署に埋蔵物発見届を提出する。

後年、発見者の土田は、埋文センターを訪れ、展示室に公開されている埴輪と面会した。その時の話では、歴史のときに授業で聞いた土器片を探しに行き、埴輪片を発見確認したとのことであった。馬渡埴輪製作遺跡の発見は、報告書でヤマユリの球根掘りの際の発見と書かれているが、市教育委員会と学校教育の教育的配慮によるものではなかろうか。その後、勝田三中の後輩たちは、後野遺跡（旧石器時代終末）、原の寺瓦窯跡（奈良・平安）、原山遺跡（旧石器・縄文・弥生）などを次々と発見し、校内の展示ケースに収蔵するが、何れも表面採集資料であった。

一方、勝田町時代に町史編纂委員会（委員長清水恒太朗）が結成され、考古学研究者で水戸市在住の伊東重敏が関わっていた。伊東は、町史編纂委員会の要請により、委員会の責任者に恩師・武蔵野資料館館長の甲野勇を推薦する。

甲野の指導により、中根君ケ台遺跡・三反田蛸塚貝塚など、町内を代表する遺跡調査を実施した。そしてその出土資料や管内の出土資料を町文化祭に展示公開した。展示遺物の解説には、甲野勇が調査した、ニューギニアの先住民抜歯風景写真や、スウェーデン皇太子の市川市姥山貝塚見学写真、縄文土器の製作方法など、当時の文化人類学的な資料を、装飾で縁取りされたベニヤ板に何枚も写真やイラスト入りで製作した。それらは、中根小学校の教室や東石川小学校の空き教室を利用して、郷土資料室として公開されたのである。この展示を見た少年は、町外からも数多く、郷土の原始・古代の夢を掻き立てられたのである。そして最後に当時建設されたばかりの勝田公民館の一室に、展示室が設置されたのであった。

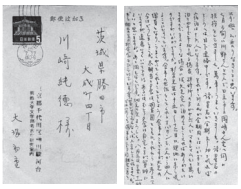
馬渡埴輪製作遺跡から出土した埴輪馬は、勝田駅近くの中央公民館の一室に伊東の修復により展示され、第三中学校には他の古墳から出土した埴輪馬を修復して戻している。

さて、左図写真の「乳飲み子を抱く埴輪」は、勝田市域最大の前方後円墳であった金上大平古墳（黄金塚古墳）から出土した。1956（昭和31）年秋の道路建設に伴う工事により、女子頭部埴輪、人物埴輪基部、斧形埴輪などの多数の埴輪片が出土したのである。わが国の人物埴輪のなかでも、乳飲み子を抱き、耳輪、ネックレスなどを身にまとう姿は、発見当初から注目され、良く知られた埴輪である。那珂湊在住の考古学研究者井上義安（父、義は十五郎穴横穴の保存会会長）の尽力により、工事中の人夫との話し合いで市帰属となる。埴輪は井上により学術書に報告され、写真入りの抜刷りが地元関係者に配布された。「乳飲み子を抱く埴輪」は馬渡埴輪製作遺跡の馬形埴輪とともに中央公民館の一室に展示されたのである。

ところで馬渡埴輪製作遺跡出土の埴輪は、昭和40年1月に、阿久津久により明治大学研究室の大塚初重のもとに報告された。大塚は馬渡遺跡の発掘にあたり、川崎純徳らと入念な現地調査を行い、昭和40年4月13日付で、明治大学文学部考古学研究室名で勝田市長　安義男、同教育長 安慶造に埴輪窯址の調査費の予算措置の申請を行っている。

予算措置の内容は、1.調査年次計画、2.調査は勝田市教育委員会と明治大学考古学研究室との共同調査とすること、3.調査費用は明治大学と勝田市との折半とし、市側の費用としては、発掘地点の補償費、地元の人夫賃、その他としている。その他は、宿舎から遺跡までの調査員の送迎は土木課の職員、宿舎の食事賄は、夏休み中の小学校の給食の調理人さんたちが行うことである。宿舎は農政課が管理していた青年研修所であり、調査が全て終了後、勝田市と明治大学が協議して学術調査報告書作成にあたるとも記されている。

調査が迫った昭和40年7月27日付の大塚から川崎純徳宛の葉書には、7月上旬に市教委の担当係長と日立市在住の埴輪出土地点の地主さん宅に挨拶に行き、万事うまくいったこと。学生以外に、県内の諸星政得（明大考古学専攻卒業生　波崎町在住）、川上博義（茨城県三昧塚古墳の県担当者、同古墳の調査は大塚と2人で担当）などが調査に参加した場合は川崎宅への宿泊依頼など、詳細に記しており、最後に杉原荘介の来跡日程も記されている。



大塚は、馬渡埴輪製作遺跡の調査前にも県内の三昧塚古墳など重要な発掘調査を行ったが、調査条件等に支障をきたし、必ずしも満足のいく調査ではなかった。1962（昭和38）年2月に、茨城県常陸太田市自然公園内駐車場建設に際し、県下で最初の埴輪窯跡が検出された。市の委嘱により、斎藤忠を団長に大川清・大森信英らが同年8月27日から9月4日にかけて調査を実施している。計11基の埴輪窯が確認されたが、調査が実施できたのは8基であった。焼土の確認により、窯跡の総数は17基前後になると推定している。大塚はこの調査に参加しており、この太田山埴輪窯跡の経験から馬渡埴輪製作遺跡の調査を容易周到に計画したに違いない。

馬渡製作遺跡の発掘届が出された昭和40年度の全国発掘届け出数は623件で、そのうち学術調査は192件（31%）であった。それが10年後（昭和50年）の全国の発掘調査は2825件であったのに対し、学術調査は131件（0.05%）となり、発掘調査数の激増に比べ、学術調査数は減少していくのである。

中学生が、発見した埴輪馬に端を発し、多くの年月を費やし学術調査を遂行し、東国の埴輪製作の姿を明らかに成し得たのは、地域・行政（県・市）・研究者が真摯に文化財に対し取り組んだからである。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目　次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと（第2回）　鴨志田篤二 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む（第20回）　山本暉久 …2
■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト（第251回）　中根綾香 …3
■考古学者の書棚「縄文時代を解き明かす」　吉岡卓真 …4

考 古学の履歴書

考古学とともに歩む(第20回)

山本 暉久

20. 神奈川県職員としての考古学 その4 神奈川考古同人会縄文研究グループの共同研究とシンポジウムの開催

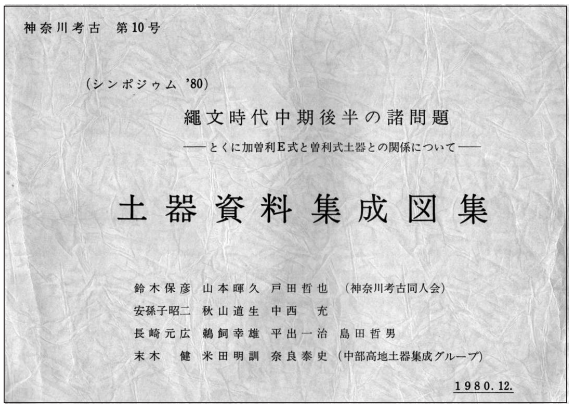
今振り返ってみると、神奈川県職員として勤め始めた30歳前後は、仕事と学問に対するエネルギーに満ちあふれていたように思う。1975(昭和50)年7～10月にかけての4ヶ月間、初めて調査担当者となって秦野市草山遺跡の調査にあたった。県道敷設に伴う調査であったが、古墳時代後期～古代の集落址(周知の遺跡秦野市No.17)と縄文時代前期中葉の遺跡(秦野市No.54)の二地点が調査対象であった。前者の調査地点は、その後隣接地に新設の県立高校が建設されることとなり、事前調査が行われ大規模な古代の集落跡が検出されている。この調査は、作業員の手配や土木機械の提供などを地元の土木建設協会に委託したり、作業事務所のプレハブ建設その他あらゆる調査準備を担当し、発掘調査に至るまでの準備が大変であった。なにもかも初めての経験でもあり、その点大いに勉強となった。

調査でも得がたい成果をあげることができた。それは、No.54地点から検出された前期中葉・関山式期を中心とする遺物包含層の検出であった。遺構は集石土坑が3基のみで住居址は検出されなかったが、関山式土器の後半に相当する土器が多く出土した。とくに、この関山式土器に共伴して、刺突文をもつ、ごく薄手の硬質な焼きが特徴的な縄文をもたない土器が出土したことは驚きであった。伊豆半島周辺に出土する「上ノ坊式土器」と呼ばれていた土器に類似するもので、明らかに東海方面から搬入された異系統の土器とみなしうるものであり、縄文土器の東西交流を知るうえで貴重なデータを得ることができた。調査後、報告書を作成するにあたり、関山式土器の特徴である各種の羽状縄文や組紐文など、縄文原体のさまざまなバリエーションを勉強することとなった。そのころは、まだ山内清男先生の博士論文である『日本先史土器の縄紋』(1979)が刊行前であり、広く流布していた山内清男先生の講義ノートのコピーを頼りに、縄文原体の復元を試みつつ報告書の作成にあたったのであった。

前にも触れたが、神奈川考古同人会が県職員を中心に創設され、機関誌「神奈川考古」が1976(昭和51)年5月に創刊された。そのころ、神奈川県教育委員会は、伊勢原市下北原遺跡、足柄上郡山北町尾崎遺跡、相模原市当麻第3遺跡などの縄文時代集落遺跡の調査が立て続けに実施され、中期中葉から後葉にかけての多量の土器群が出土していた。このことから、とくに中期後葉の土器編年案の作成を企図し、神奈川考古同人会に縄文研究グループが組織され、その研究にあたることとなった。メンバーは、鈴木保彦(日本大学)、熊谷肇(神奈川県庁)、白石浩之(愛知学院大学)、岡本孝之(慶應義塾大学)と私であり、「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年」案の作成に取り組み、加えて、この方面の研究にくわしい戸田哲也(玉川文化財研究所)が特別参加することとなった。彼との長いお付き合いの始まりであった。神奈川の中期後半の編年試案を作成するにあたり、県内の土器実測図を集成し、それを元に土器編年を組み立てることとした。とくに神奈川の場合、在地の加曽利E式とともにも山梨・長野県の八ヶ岳南麓域に分布の主体をもつ曽利式土器の流入(模倣土器を含む)が顕著であり、その両者の土器を対比させる形で編年案を作成することとなった。その成果は、1978(昭和53)年4月に「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案 第Ⅰ版」(神奈川考古第4号)として結実した。この号は、その年5月に開かれた日本考古学協会総会の図書頒布会で、爆発的な売れ行きを示した。土器実測図を用いた編年図の斬新さが注目されたものと思われる。

さらに、この成果をもとに、東京都、埼玉県、山梨県、長野県の若手研究者に呼びかけて、中部山地～南西関東域の広域な中期後半の土器編年を検討するシンポジウム「シンポジウム'80 縄文時代中期後半の諸問題－とくに加曽利E式と曽利式土器との関係について－」を、1980(昭和55)年12月に横浜市磯子区薬業会館において開催した。このシンポジウムにあわせて刊行した、横組のB4版の大部な「土器資料集成図集」(神奈川考古第10号)(写真参照)は、2000個体を超える土器集成図と編年図等からなり、その後のシンポジウムにあわせて刊行される資料集の先駆けをなすものであり、参加者も多く、上々の売れ行きであった。その記録集は翌年「神奈川考古第11号」としてまとめられている。

こうした共同研究による土器型式編年は、地域ごとに組み立てられ、それが横のつながりを経て広域な編年体系を生み出すという、個人的な研究をさらなる高みへと導く利点があった。この経験を経て、1983(昭和58)年12月には、「シンポジウム'83 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」を、川崎市中原市民館ホールにおいて開催した。従来不明な点が多かった早期末・前期初頭の土器群の様相について、神奈川県、東京都、埼玉県、千葉・茨城県、山梨県、長野県、静岡県、愛知・岐阜県域を網羅する広域な編年体系を確立することを目的とするものであった。参加した研究者も多く、事前の準備として各地の資料見学も泊まり込みで実施したことも大きな成果であり、大部な資料集成図集(神奈川考古第17号)とその記録集(神奈川考古第18号、1984)も刊行することができた。


神奈川考古 第10号

(シンポジウム '80)

縄文時代中期後半の諸問題

――とくに加曽利E式と曽利式土器との関係について――

土器資料集成図集

鈴木保彦 山本暉久 戸田哲也 (神奈川考古同人会)
安孫子昭二 秋山道生 中西 充
長崎元広 鵜飼幸雄 平出一治 島田哲男
末木 健 米田明訓 奈良泰史 (中部高地土器集成グループ)

1980.12.

▲「縄文時代中期後半の諸問題 資料集」1980

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英弐記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工楽善通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 251

松平広忠公御廟所 ～愛知県岡崎市

中根 綾香

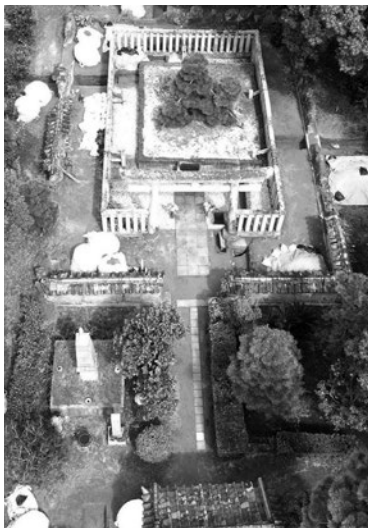
松平広忠公御廟所の概要

愛知県の中央部に位置する岡崎市は、南北に矢作川が貫流し、東西を東海道が結びます。その二つが交差する地点に徳川家康生誕の城として知られる岡崎城があります。今回紹介する松平広忠公御廟所は、岡崎城のほど近くに位置し、徳川家康が父・松平広忠の菩提を弔うために創建した松應寺の境内に所在します。

御廟所の地は岡崎城内で家臣に殺された松平広忠が荼毘に付された場所で、松が植わる基壇を中心とした構造となっています。中心の松は広忠が亡くなった天文18年（1549）に家康が広忠の墓上に小松一株を自ら植え、隆運と松平家の繁栄を祈念したとされるものです。この地は岡崎城内で家臣に殺された広忠が荼毘に付された場所でした。永禄3年（1560）、桶狭間の戦いの後に今川氏から自立した家康は岡崎城に復帰し、広忠の御廟地の傍らに寺院を建立します。これが松應寺です。慶長10年（1605）の広忠57回忌には家康によって整備が行われ、御廟所には松廟・拝殿・鳥居・玉垣等が備わり、本堂・方丈・庫裏の他、塔頭にいたる大伽藍が建立されました。慶長10年の整備を示したとされる絵図には現在の御廟所の構成と概ね一致する状況が描かれており、この段階の整備が現在の御廟所の原型となったと考えられます。以後、家康をはじめ、二代将軍秀忠・三代将軍家光・十四代将軍家茂が参詣しました。

史跡指定範囲と範囲確認調査

さて、松平広忠公御廟所は昭和37年に市史跡として指定されていますが、その指定範囲は御廟所中心部の基壇の一部のみとなっていました。しかし、実際には松が植わる基壇を中心として玉垣・土塀・土堤の三重の囲いが方形に巡っており、入口部分には山門が配置されています。平成27年には、台風による御廟所の土塀の崩落をきっかけとして、指定範囲の見直しの必要性が指摘されました。こうした状況であったため、平成28年に本来の史跡範囲を検討する目的で範囲確認調査を実施しました。調査の結果、玉垣や土塀、鳥居の基礎構造が判明し、御廟所の門から外郭を取り囲む土堤までが御廟所範囲として妥当であると確認されます。範囲確認調査および史料調査の結果を受け、平成30年に史跡範囲の追加指定を行い、御廟所本来の範囲が指定となりました。



▲範囲確認調査時の御廟所（岡崎市教育委員会提供）

範囲確認調査では御廟所整備時に造成が行われ、各構造物の基礎が据えられたことが判明しましたが、江戸時代の絵図とは異なる部分もみられました。一方で、並行して行った史料調査により、各時代の御廟所の規模を記した史料の存在が明らかになりました。これらの史料と遺構を比較検討することで、現在に至る経緯がわかってきました。現在の御廟所を構成する構造物のうち、土塀および土堤は慶長10年段階を描いたとされる近世の絵図には描かれておらず、その後の御廟所修理の中で構築されたと考えられました。明治期の史料では近世に存在した透塀の基礎と思われる石垣を売却した記録がみられ、現状の土堤はその代替と想定されるなど、困窮する寺院運営の中でも御廟所は修築が重ねられ、現代まで維持されてきたことが判明しました。

松應寺をはじめとした松平・徳川氏ゆかりの寺社では、近世初期に徳川氏の寺社として威厳ある景観が整えられますが、その後の維持修復は各寺社の大きな課題となります。松應寺はその格式の高さにより、幕府の寺社政策において幕府による修理を受ける寺社とされ、実際に修復が行われた記録が残ります。それでも近世後期においては全面的な修復は得られず、明治期には荒廃した状況であったことがうかがえました。こうした近世・近代での修復も含めて、史跡として現代まで受け継がれてきた文化財であることを強く感じた調査でありました。

御廟所の史跡整備

御廟所は近年の風水害により破損が進み、土塀は大規模な崩落が生じた状態でした。また、御廟所を構成する各構造物の損傷も著しく、範囲確認調査の結果をもとに令和元年度から令和3年度にかけて史跡整備を行いました。土塀・土堤の復元、山門の修理、玉垣の補修など御廟所一体として整備を実施し、中でも土塀の復元は完成まで3年に及びました。

土塀は版築と呼ばれる土を強く突き固める工法で作り上げられており、約10cm単位で土を叩き締め、10数層で構築されています。損壊した箇所の補修・復元工事においても伝統工法を採用し、土塀範囲を囲んだ板枠の中に土を入れ、たたき棒で1層ずつ突き固めていきます。版築を行う工程では土塀修復体験会を実施し、子どもから大人まで実際の土塀の構築に参加していただくことができました。文化財そのものの修復に参加できることは稀であり、貴重な機会になったと感じています。一連の整備は史跡内建造物の修理となるため、史跡としての遺構への配慮の上で、史跡の構成要素たる文化財建造物として最善の復元修理を行う必要があり、これらの両立を常に検討しながらの整備となりました。

御廟所建立以来、各時代で重ねられた修復の歴史に今回の整備が加えられたことになります。令和の修復の姿を多くの方々にご覧いただき、後世に受け継がれることを願っています。

▲御廟所中心部（整備後）

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは安藤由真さんです。

考 古学者の書棚

「縄文時代を解き明かす ― 考古学の新たな挑戦 ―」

阿部芳郎 編著／岩波ジュニア新書(2024)

吉岡 卓真

はじめに

恩師である阿部芳郎先生編著の書籍をお勧めしたい。今回は4人の研究者により考古学、動物考古学、植物考古学、そして生物・人類学それぞれの視点から縄文時代を解き明かすというテーマのもと、これまでの研究の成果や、最新の研究事例も踏まえた縄文時代の内容が記されており、大変読みごたえのあるものであった。

本書の内容

ジュニア新書だけに、難解な専門用語の使用は極力控えらえており、読み始めたら最後まであっという間に読み終えてしまえるほどの読みやすさがあった。ただし、書かれている内容は、どれも各研究者によるこれまでの研究の蓄積が反映されているため中身が濃く、さらに最新の研究成果も含まれているため、何度も読み返したくなるものだった。

読後すぐに感じたことは、その平易な文書表現とは裏腹に、中身の濃い内容である点などが、甲野勇著の『縄文土器のはなし』に似ていると感じた。私の学生時代、縄文土器研究といえば、土器の編年研究が主流であり、編年研究をすることが縄文土器の研究であると、入学して間もない私は思い込んでいた。しかし甲野氏の『縄文土器のはなし』を読み、編年研究以外にも、「道具としての縄文土器」という視点を持つことの重要性を学ぶことができた。今でも時折読み返して、研究のヒント得るための重要な文献となっているが、今回紹介する書もそうした一冊になるものと考えている。

第Ⅰ章では、阿部先生が自身の研究の根底にあるものとして「人間とは何か?」という問いに答えようと研究を積み重ねられてきたこと、それを明らかにするためのテーマとして「自然物の資源化」をもとに研究を進められてきたことが記されている。これはこれまでの書籍の中にもたびたび登場するキーワードではあるが、今回はその資源化について「ヒト」にも適応している点が新しい視点であった。第Ⅳ章の中で、生物学としての「ヒト」が、社会・文化的な「人」として資源化されるという着想のもと、「ヒト」が「人」化していくにあたって、土偶の役割について考察した内容があった。土偶を含めた「第二の道具」を研究していくうえで刺激的な視点であった。

米田先生による、「縄文土器とは何か?」というテーマでは、縄文早期の海浜部に位置する夏島貝塚と、内陸部の栃原岩陰遺跡の縄文土器の脂質と窒素による分析で、それぞれの土器の利用が地理的特性に応じて使われていたことや、それぞれの地域の人骨の食性分析も土器の分析結果と整合的であることが示されていた。土器でどのようなものを調理していたか?私の学生時代には漠然とした想像しかできなかった問いかけに、理化学分析の目覚ましい進展が、答えを導きつつあることが記されており、改めて研究の進展を思い知らされた。

樋泉先生による「貝塚からわかる縄文のくらし」では、動物考古学や貝殻成長線分析の方法とその特性についてわかりやすく語られており、縄文時代草創期から後期までの各時期の資源利用の実態を動物考古学の視点から解説されており、列島内での陸産、水産資源の利用の変遷と地域的特徴が浮き彫りとなる内容であった。

佐々木先生による「植物の利用からわかってきたこと」では、植物考古学の視点から、縄文時代早期段階には列島各地から植物利用の事例が蓄積されつつあることが紹介されていた。それにしてもミズキやキハダ等のベリー類が炭化種実や土器圧痕として見つかるなど、堅果類以外の食用の植物利用の多様性が徐々に明らかになっている点は興味深いものであった。また、編組製品の素材を獲得するまでの植生管理がいかに重要かという点を、製作復元実験を行う過程から得られた経験をもとに語られている点は、大変興味深く、縄文人がいかに植生を管理していたかを考えさせられた。

さて、上記にあるような各研究者による縄文時代に関わる研究内容の話はもちろん十分面白いものであったが、特にⅤ章の「なぜ研究者になったのか」は各研究者がどのように研究の道に進んだのかが記されていてとても興味深いものであった。

私はいずれの先生とも少なくとも10年以上、学生時代から含めると四半世紀以上もお世話になっている先生ばかりであったが、いまさら「どのように研究者になったか?」について、興味はあっても聞く機会を逸したままになっていたが、各先生はその点に関して詳細に語られており、大変興味深く拝読させていただいた。

どの先生方も、「人間を深く知りたい」という興味・関心事から、それぞれ専門とする分野に足を踏み入れ、それを基に研究を行っていることが感じられた。さらに「人間を深く知るため」の探究心は、まだまだ続いていくという熱意を読み取ることができ、若い人に向けたメッセージが込められていたが中年を迎えつつある私にも胸に響くものがあった。

おわりに

私は今、国史跡である真福寺貝塚の調査に携わり、台地上では貝塚や盛土遺構の調査を経験し、現在は谷部にある泥炭層の調査を実施しています。貝塚や盛土遺構の調査に携われるだけでも幸運なことなのに、泥炭層調査にまで携われるとは、夢にも思いませんでした。調査では、今回ご執筆のいずれの先生にも日々ご助言やご指導をいただきながら調査を進めています。本書には、先生方からご指導いただいている点や、縄文時代の遺跡を調査するうえでも参考となる内容が多く盛り込まれており、また明日からの発掘調査や研究に気を引き締めてのぞみたいと思わせてくれるそんな書籍です。

アルカ通信　No.259

発行日　2025年4月1日
企　画　角張淳一(故人)
発　行　考古学研究所（株)アルカ
〒384-0801　長野県小諸市甲49-15　TEL：0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp